

一蓮托生

令和6年度 朝礼(5/27) 校長の話

おはようございます。

今は毎日、体育祭に向けて練習を重ね、気合いの入った声が響いています。気持ちが充実していて大変素晴らしいと思います。中でも、リーダーたちの声が素晴らしいです。整列をうながす声、種目練習のあと、どこが悪かったか、どこが良かったか、その感想を皆に伝える声。そういう声がクラスの気持ちを確実に高めています。本番までぜひ頑張ってください。

さて、今日の四字熟語は「一蓮托生」です。一蓮の「蓮」とはハスの花のことを言います。皆さんはハスの花を見たことがあるでしょうか。池や沼に生えていて、夏になるとピンク色の大きな花をつける植物です。仏教の世界では、人は死後、このハスの花の上に生まれるといわれています。「一蓮托生」とは、死んだ後も同じハスの花に生まれ変わる、つまり仲間とともに運命をともにするという意味で使われます。また、別の言い方をすれば、何があっても仲間を見捨てない、強い絆をもつという意味もあります。

皆さんは今回の体育祭で、学年種目や大縄飛びなど集団で取り組む競技に挑んでいます。集団競技は、みんなで気持ちをそろえないと成り立たない競技ですが、しかし、いつもうまくいくとは限りません。練習する中で、誰かのほんのささいなミスがクラス全体の動きを止めてしまったという経験は一度や二度ではないかもしれません。そんなとき、皆さんはどんな思いでいるのでしょうか。

私たちの心の中は自然と次のような心理になります。まず、ミスをした人は真っ先に「自分のせいではない」と考えがちです。隣の人のせいにしたり、前の順番の人のせいにしたりします。一方、ミスをされた側は、「あの人が下手だから、自分たちまで巻き添えをくうんだ」と、ミスをした人を責める傾向にあります。これを専門用語で「行為者・観察者バイアス」といいます。つまり、どちらも他人を責めるという心理が働くのです。

そんな両者が言い争えば、何も解決しないことは目に見えています。では、どうしたらいいのでしょうか。実は体育祭を通して、皆さんはそれを学んでいるところだと言えます。ミスを克服する方法は、皆さん一人ひとりがその答えを出さなくてはなりません。それが体育祭での学びの一つです。

そのとき、絶対に忘れてはならないのは「一蓮托生」ということです。一緒に競技をする仲間は、共に良いことも悪いことも経験する、運命共同体であるということです。何があっても仲間を見捨てない、強い絆でつながっているのですから、同じ目標に向かってあきらめないで前へ進むという強い気持ちを持ち続けてください。

たとえば、ミスが起こったら、どんな場合でも、それがたとえ自分から離れたところで起こったことだとしても、「自分にも問題があったのではないか」と考えるということを習慣にするのも良い方法です。同じハスの花の上にいる私たちだから、何かが起こったらそれは自分とは無関係ではいられないはずです。自分が変わることで集団全体が変わることにつながる、それも「一蓮托生」の精神といえるでしょう。

体育祭は、体力を高めることが目的の一つです。しかし、それだけではなく、体育祭をきっかけに集団としての力を高めることも大切な目的の一つです。体育祭が終わった後、運命共同体としてのクラスの絆がより深く生まれることを期待します。

先生の話は以上です。